

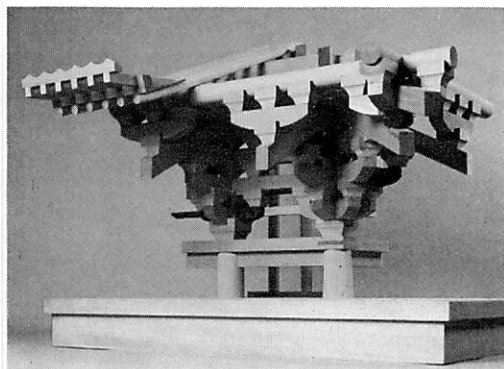
飛鳥資料館の特別展示

飛鳥資料館

特別展示「小建築の世界」 1973年、平城宮跡で発掘された殿堂雛形部材は、元興寺五重小塔と同じく、実物の十分の一模型と推定された。この他に各地で小形斗、小形瓦などの出土例があり、古代に小建築が広く存在したことを物語る。今回展示した、上記雛形部材による三手先斗棋の復原模型と、海竜王寺五重小塔の現寸模型は、精巧な模型としての小建築の代表例である。また仏龕・厨子としての小建築も数多く、法隆寺玉虫厨子(模型)、兵庫・古法華山石造仏龕(模型)、重文静岡・智満寺木造仏龕が一堂に会した。一方、埼玉・東山遺跡出土の瓦塔・瓦金堂は、土製の小伽藍とも言うべきものである。これらに加えて、古墳時代の小建築としての家形土器・埴輪の優品が出陳された。岡山・女男岩出土の家形土器は、最も初期の素朴な姿を示し、三重・石山古墳出土家形埴輪は典型的な倉を表す。大阪・美園遺跡出土のものは、外部の表現の写実性に加えて、内部まで作られているということで、一躍脚光を浴びたものであり、大阪・今城塚出土のものはその大きさで他を圧倒する。

これら小建築が、失われた古代建築の姿を残す貴重な遺物であることを見ていただくと同時に、時代と用途を超えて、小さな建物を造りだした古代人の心に触れていただくことができたと思えばさいわいである。(松本修自)

特別展示「藤原宮発掘五十年」 藤原宮の発掘調査は、1934年に開始されて以来、戦後しばらくの空白期間を挟んではいるが、本年度で50年目にあたる。飛鳥資料館では、戦前の日本古文化研究所による調査の資料を収集するとともに、調査の関係者である和田軍一氏や松崎宗雄氏あるいは発掘作業に従事した人々から当時の状況を聞き取り、従来必ずしも十分に明らかでなかった調査の経緯の一端を記録することができた。なかでも、宮内庁書陵部に保管されていた日本古文化研究所関係の資料のうち「藤原京址実測平面図」(縦3.1m×横2.3m)は、藤原宮周辺の詳細な地形図(縮尺300分の1)に大極殿や朝堂の遺構を描き入れたもので、当時の調査の質の高さを示すものとして注目された。展示では、日本古文化研究所をはじめ奈良県教育委員会それに当研究所による発掘調査研究史に関する写真資料や実測図面、書簡などを公開した。また、特別展示室内を藤原宮西面中門にみたてて、敷石、礎石、唐居敷、扉、柱などを原寸大で復原し、室内に土器や瓦、木簡などの遺物を、近年の研究成果に基づいて効果的に陳列するなど、藤原宮に関する調査研究の歩みと現状を紹介した。(井上和人)



平城宮跡殿堂雛形斗棋模型